



20号発行にあたり

HEART to HEART

12～3月こうのとり外来の成績

編集後記

なぜ、私が不妊治療をはじめたのか？

吉川文彦

今回の倶楽部Kは創刊20号、記念の号ということで、編集長から私に執筆依頼が来ました。いつも感動的な患者さん達の話で支えられている倶楽部Kの内容に、とてもレベルは及びませんが、私の医者としての初期の話ということで上記表題にさせていただきました。

今の私は、患者さんに支えられているとって過言ではないと思います。倶楽部Kの10号記念の巻頭にも書きましたが、治療方法のわからない患者さんに会ったときに、それを理解し適切な治療をするために勉強する。この繰り返しで今の私があるからです。私は医者になったとき幾つかの決意を持ったのですが、その一つが決して知ったかぶりをしないということがありました。特に医者一年生二年生の頃は、わからないことだらけです。患者さんの信頼を得ようとするれば、“わからない”という言葉は禁句です。でも、私はわからないときには、“今はわからないので一週間後にもう一度来てほしい”とお願いし、その間に勉強しました（もちろん緊急の患者さんは全く別です。そんな悠長なことをいつていたのでは患者さんは死んでしまいます）。私が“わからない”と正直に話したとき、別の先生の元にかれる患者さんはしょうがないと思いました。なんとっても一年生の私より他の先生の方が経験も知識も上なのは誰の目にも明らかだからです。それでも一週間後に私のところを再び訪れて下さる患者さんを大切にしました。

医者になってもう20年以上が経過しました。私は出来の悪い学生だったため、卒業時どの科に進むかを決める際のポイントは、自分にもなんとかやっていけるのではないかと思える診療科、また医者として何らかの治療をした時にそうはいつでも満足感が得られる診療科の2点でした。それで、産婦人科を選びました。産婦人科の医局に入局した後、不妊症治療を選択するまでには幾つかの転機がありました。

はじめは、こうのとりの贈り物の中にも記述していますが、私が医者になったばかりの頃、その当時大先輩だった先生（T先生のことですが）が私に、“吉川、新人はこういう論文を読んでまとめてその要約を先輩に渡さないといけない。”と命令され、医局の机の上にあったランセットという外国の医学雑誌を読まされたことが第一歩でした（このランセットという雑誌は大変に高い評価を受けている超一流誌です）。そこに掲載されていた論文は習慣流産についてのもので、その後、幾多の論文に引用文献として使われていました（医学論文はその後いくつかの論文に引用されるかが大切で、引用の数が多いだけ重要な論文という位置づけがなされます）。この中に免疫的な機序が妊娠流産に関係しているとあり、私はすごく興味を覚えたのを記憶しています。妊娠維持にはHLA（ヒト主要組織適合性抗原）の夫婦間の違いが重要であるというものでした（詳しくはこのとりの贈り物を参照。今はこの考え方は持っていませんが、その当時は信じ切っていました）。そして、私が諏訪赤十字病院に出向していたときに会った流産の患者さんに、どうして流産したのかしつこく質問され、あまりにしつこかったので、軽くかわすつもりで、“あなたはHLAって知っています？”と、

偉そうに話した事が次の転機となりました。その方は“ええ知っています”と主張され（これはあとからその本人から“実は知っていませんでした。知っていると言えないと続かないような気がして”と告白がありました）、詳しい話をした後、“私が大学に戻ってから検査をしましょう”という事になり、習慣流産の研究をスタートさせることができることになりました（Nさんといいます。茅野の方でした。私が大学に戻ったあともきてくださり無事一人目を出産しました。その後、御主人の転勤で岐阜に移っていたのですが、第2子を妊娠し、岐阜から大学病院の私のところまで妊婦検診に通って下さり出産されたことを思い出します。今でこそこの諏訪マタニティークリニックには帰省分娩でもないのに関東から通院して下さった妊婦さんや、関西から来て下さった妊婦さんなど県外からの通院患者さんはたくさんいらっしゃいますが、その当時大学病院に県外から来て下さる方は皆無でした）。

2年生になった時に、また大学病院に戻りました。習慣流産の研究をしようと思い、既往歴のある患者さんを集めていきました。しかし、当時の大学病院には全く実績がなかったので、2-3ヶ月に新しい1人の患者さんが見つければ良いという状況でした。

ここでもう一つの転機が訪れました。それは外科にいった私の同期が、事もあろう2年生の私に不妊を主訴としている患者さんを紹介してきたのです。通常産婦人科において不妊治療は、産科（お産）の基礎ができるようになり、婦人科の基礎ができるようになり、一人前に産科婦人科の外来ができるようになった後に学ぶべきものでした。2年生の私にそんな患者さんを紹介されても困ります。先輩に相談したところ、“紹介されたならおまえがやるしかないじゃないか。”と冷たくいわれ、手探りで不妊治療をはじめたのです。先輩の先生に聞きながら、新たに勉強しながら、と、その中で不妊症の患者さんの中にも原因不明の患者さんがいる。この中に習慣流産と同じように免疫的な原因でごくごく初期の妊娠はするが着床するかしないかのうちに流産になっている人がいるのではないだろうか？と考えたのです。先輩に相談したところ、“自分でやるしかないだろう。患者さんの協力がほしいなら自分でみないといけない。”といわれ、原因がある不妊症は先輩の先生が、原因が分からない不妊症の患者さんは私が外来をやるということになってしまったのです。

それまでの不妊外来は週一度だけでした。実際に不妊外来をやっていると週一日だけでは間に合いません。また一般外来の患者さんの中に、御主人の精子の少ない方が人工授精をやってもらいたいと自分だけで排卵日を予測し、御主人の精液をもってこられている方もいました。私の担当の外来日だけではなく、私の都合がつく日はすべて外来にでて予約制で診察するようになりました。日曜日にも必要な患者さんは1人とか5人とか診察するようになりました。

そんなうちに、3年生の終わりには、不妊症治療を行っていた先輩の先生がみんな医局を辞めて外の病院に行ってしまいました。不妊症治療は3年生の私にすべて任せられました。不妊症治療に携わる医者もスタッフも私たった一人です（今でいうエンブリオロジストも検査をしてくれるスタッフももちろんいません）。それまでも、一人だけでできる治療を勉強していましたが、さらに一生懸命勉強するようになりました。人工授精の際のスィムアップ方や、パーコール不連続比重勾配法などをはじめました。また抗精子抗体検査もできるようになりました。

血液のホルモン検査も2時間で自前でできるようにしました。習慣流産の夫リンパ球による感作療法は2年生の頃から行っていました。

こんな偶然の流れの中で私の不妊症治療との関わりができ、今に至っています。ほとんどすべての不妊症の治療を、ほぼ独学ではじめてきました。

印象に残っている患者さんはたくさんいます。今現在の私にできる治療が今から15年前に可能であったのなら、本当に救われた患者さんがたくさんいたと思います。新しい治療の技術を修得するたびに、“あーあのときにこの治療ができていたら。”といつも思います。これから5年後、10年後にも、“あーあの時この技術があったのなら”と今を振り返っているといます。

御主人の精子を持って一般外来に来ていたNさんもよくおぼえています。今回の人工授精が失敗したら子供は諦めますといっていて、それ以降私の前に来ることのなかったHさん。この検査だけがまだクリアーしていないんですといっていて、ミューラクルツロップテスト（今この検査はほとんど行われていません）を希望され一般外来にこられ、ずっと診察台の上で待たされていたKさん。暑い日曜日の人工授精後に脳貧血をおこしたHさん。術後ICUに收容され、生死の境をさまよっている際にうわごとで“私とかわって”といったKさん。本当にたくさんの患者さんがいました。今思い返してみると、大学時代の患者さんは、うまく不妊治療に成功して妊娠された方々よりも（もちろんよく覚えてはいるのですが）、うまくいかないまま色々な事情で私の元をさった患者さんの方が印象に残っています。いままで、すべての治療を順風満帆に成功させてきているわけではありません。失敗も数多くありました。多くの患者さんに学ばせていただいたおかげで、今の諏訪マタニティークリニックの不妊治療があります。



HEART to HEART

『大事にしたいこと』

〈Aさん〉

この度は『倶楽部K』創刊20号発行おめでとうございます。初刊から読ませていただきましたが、励まされる方、共感して涙する方、皆さん、それぞれの思いで読んでいらっしゃるのだと思います。

私が、治療を始めたのは、今から14年前です。当時は、不妊に関しての情報や周囲の認知が少なく、不安と孤独の中でのスタートでした。最初の1年は人工授精での治療をし、その後不妊専門のクリニックで、ギフト法（腹腔鏡手術で腹部を切開し、受精前の精子と卵子を卵管に戻す方法）を行い、一回目で妊娠に成功しました。しかし、妊娠15週で私の体に異変が起き、入院。主人には、「最悪の事態には、母体の命の危険性もあるので、覚悟しておいてください」と告げられました。まさに、天国から地獄へ突き落とされた気分でした。恐怖に襲われながらも、元気な赤ちゃんをこの手に抱けることを想像し、一日一日が無事に過ぎていくのをベッドの上で祈りました。その祈りも届かず、予定日まで、あと1ヶ月半というところで、お腹の中で静かに消えてしまった小さな命。私の命と引き換えに、一人で逝ってしまいました。小さな棺に入れられた姿は、これからもずっと忘れられないと思います。

私たち夫婦には、越えなければならない壁が二つあります。一つは、不妊、もう一つは自己免疫異常。そして、それを教えてくれたのは、天国に逝ってしまったその子でした。私にとって、不妊とは自分の心と向き合うことであり、自己免疫異常は自分の体との戦いでした。それから、また、ふり出しに戻り、大きなリスクを抱え、今度は長い長い不妊治療が始まったのです。その後、その不妊専門クリニックに研修にいらっしやっていた吉川先生の診察を受けたこともあり、その時の看護師さんに「吉川先生はとてもいい先生だよ。」と言われました。（今ではその言葉通り、ずっと信じてついてきて良かったと思っています。）そして、吉川先生が不妊診療を始められ、私も諏訪マタでの治療を受けることにしました。ETの時、培養士の方が、「〇〇さん、分割卵〇個戻します。」と言った後の吉川先生の「はい。」という気合いの入ったお返事は、治療を受ける側にとってみると、一人一人真剣に向き合ってくれているという気持ちがとても伝わります。こちら、『今度こそ。』という気持ちになります。これは、吉川先生が治療を始められた最初の頃からずっと変わりません。

そして数年が経過し、数十回の体外受精の末、やっと心音が聞こえたのも束の間、今度は妊娠8週で心音が確認できなくなり、流産を告げられました。その時は、そのまま少しでも早く家に帰りたくて、あふれる涙をこらえながら運転して帰りました。家で待っていた主人に、「だめになっちゃった。」と告げ、主人に「よく一人で頑張って帰って来られたね。」言われた途端、涙が止まらず玄関で大声で泣きました。

自然に子供を授かっていたら、しなかったであろう体験をたくさんしたし、泣きながら話し合った夜もあり、眠れなかった夜もあり。それでも、何年も治療を頑張ってきたのは、仕事をずっと続けてきたことと、海外や国内を旅行したり、スポーツをしたりと、夫婦共通の趣味を持って楽しんできたからだと思えます。主人は私の体を気遣って、治療をそろそろ終りにしようと言ひ、私も自分の中で納得して、この採卵で終りにしよう、二人の生活を大切に生きていこうと考えていたとき、妊娠反応が陽性。数値が少し低めでしたが、吉川先生に「今度こそは何としてでも生みたいですよ！」と言ひ切った私。今回は仕事を辞め、吉川先生の管理のもと長い入院生活を経て、もう一つのハードルを越え、無事に産むことができました。慣れとは不思議なもので、何年もの間、治療で諏訪マタに通うことが生活の一部になっていたの、産んで通わなくなってからしばらくの間は、何かを忘れていたような、変な気分が半年ほど続きました。

それから数年後、新しい仕事も楽しく、充実した日々を送っていましたが、「自分の体を大切に生きてほしい。子供は一人で充分だ。」という主人を説得して、残っていた凍結卵を戻すことにしました。一回目はだめでしたが、これで終わりにして長かった不妊治療にピリオドを打とうと思ってチャレンジした2回目で陽性反応がでました。妊娠継続には至りませんでしたが、心の奥から『これで終わりにしていいの?』という声が聞こえてきます。今回、原稿依頼を受けた時、私自身、長いこと不妊治療で悩み苦しんできたので、今、その状態にいる方にとっては、紆余曲折があったにせよ、子供を授かれた私が原稿を書くことで、落ち込ませてしまったり、いやな思いをさせてしまわないだろうかと思ひました。でも、私の治療の道のりを紹介しようと思ひました。

諏訪マタに不妊治療に通っている人たちは、皆、同じ悩みを抱えた同志のような気がします。不妊治療の終わりを諏訪マタで迎えてほしいと思ひます。それにふさわしい病院だと思ひます。どういう形であれ、終わりはある訳です。しかし、ピリオドを打ったからといって、それまでのことが消えてなくなるわけではなく、それはずっと自分の中にあり、心の中にしまっていていくこととなります。皆が良い終わりを迎えられるといいな、と思ひます。

〈Mさん〉

「可能性はあります。」吉川先生の言葉に、出口を見出す思いで治療を決めました。私は妊娠できるだろうと、最初の一步は高をくくって。今回はできなかった、が何時しか今回もできなかったに。でも次はもしかしたら・・・と半ば期待を持ち越すように、ひたすら人工授精を続けた1年間。日々の辛は朝に上げ、協力してくれる夫を横目になぜか自然妊娠に近い形にこだわった結果、夫ではなく、待望の赤ちゃんでもなく、囂らずも自身の傲慢さと向き合うことになりました。「ふたりにとっては息継ぎの時間じめることし、小児科に受ける時間は短く越したことはない。」この意味をかみしめながら、いま、私たちは体外受精に挑戦しています。かなうなら命をつないでゆきたい。医療の進歩がもたらす恩恵を、望んで得られぬすべての女性にいつの日か必ず。願ってやみません。

12月~3月 [4M] こうのとりの外来の成績

妊娠 88人	採卵 409人
(IUIを含む)	胚移植 348人
	妊娠 144人

編集 後記

岡村

初めまして、新たに相談室のメンバーに加わりました培養士の岡村です。私達培養士が皆さんに顔を見せる機会は、やはり体外受精の際が一番多いのですが、先日胚移植の説明に行った患者さんから「詳しく説明してもらったお蔭で安心して移植を受けることができました。ありがとうございます。」と、とてもうれしいお言葉を頂きました。この時感じた気持ちを忘れる事なく、これからも頑張っていきたいと思ひます。

中島

今年の1月ニンテンドーDSlightが当たり、今年は何か他にも当たりそうな予感が!?先日通販で買い物したら、2000円分のお買い物券が当たった、と喜んでいたらよくよく見るとそれは、一万円以上のお買い物したら使えるという事でした。これはいい事なのかなんなんでしょうね・・・

小林

Bagが大好きな私。一ヶ月程前にかわいいBagを見つけたんですが、買いたい気持ちを抑えその時は我慢。でもずっと気になっていました。つい先日、仕事が忙しかったので「よし!自分へのご褒美」と意気揚々とBagの元へ。しかし・・・そのBagは誰かの元へ。店内を2~3周グルグルしてみましたがいっぱいありませんでした。出逢いはとっても大切。ビビビと来た時には“即買い”を心に誓いました。

保科

ニンテンドーDSの漢字検定ソフトを買いました。10級から始めて簡単簡単と思ひながらやっていたんですが、そのうち「あれ、どんな字だっけ?」というのが出てきて必死に思い出しながらやっています。筆順や誤字探し、四字熟語などもあって、日本語って奥が深いなあと思ひつつ、トレーニング中です。次は英語に挑戦しようかな。

坂本

思い立った事があってやっています。思い立ったなりの理由があるので、何とか継続したいと思ひますが、どう考えても長期戦。勝敗の行方は根気かな。気張らず気負わず、楽しみながらやれたらいいな。目的を持って過ごす、といふのはこんなにも時間の使い方が変わるんだと痛感しているところです。過ぎた時を後悔しても仕方ないので、またスタートラインで仕切り直しだ。

〈Tさん〉

職場でカミングアウトして開き直ったところで肩の荷が下りた。

「子供がほしい」その勇気や熱意を分かってくれる人はきっと身近にいるはずだから。



私は現在、小学校で学校給食の栄養士をしています。この4月、育休が明けて職場復帰しましたが、産育休に入るまでの14年間、2校兼務で大変ではあったけれども楽しんで充実した仕事をしてきました。

結婚したら子供は簡単に授かるものだと思っていました。不妊治療という言葉は知っていたし、同じ職場に実際、不妊治療をしていた人もいました。ある意味、「他人事」。その同僚がある時、治療に関して心ない一言を職場であびせられ泣いていたのを見て、結婚を控えていた私は「不妊治療は、こんなにも職場の協力は得られないのか…」と思いました。結婚し、なかなか妊娠しないので自分の中に焦りが見え始めた頃、義弟夫婦に子供が産まれました。長男の嫁として今後の風当たりが強くなるのは目に見えていましたので、地元の総合病院に検査に行ったところ、子宮内膜症が発覚。始めて聞く病名に愕然。自分も不妊治療…他人事ではなくなりました。同居している義父母にも状況を打ち明け、子宮内膜症について本も買って自分なりに勉強もしました。腹腔鏡手術も受け、人工授精を数回試しても反応は出ませんでした。

数年後、年齢もいよいよ30代。ゆっくりしていられない。不妊治療に本腰を入れるためには、上司にカミングアウトしなくてははいけません。職場も上司も結婚当時とは変わっていましたが、やはり元同僚の苦勞を知っていただけに打ち明けることに不安と恐怖感がありました。覚悟して校長室で打ち明けたとき、校長はじっと黙って聞いた後、「よし分かった」とまず一言。そして「仕事というのは、今、どうしてもやっておかないと周りに迷惑のかかるものもあるが、時間や身体の許すときにまとめてやっても何とかなるものもある。他の人が出来る仕事もある。どうしても仕事が回らなければ、校長が頭を下げて他の職員にお願いしてやってもらったっていい。でも、T先生の子供を誰かが産んで育てることは出来ないし、そのための治療も代わってやることは出来ない。それに、子供を授かるにはタイムリミットもあるから今、最優先してやることは治療だよ。仕事を辞める必要もない。そちらを優先しましょう。」こんな心強い一言に私は救われました。度重なる通院に伴う年休も取りやすくなったし、同僚にも隠すことなく治療をすることが出来ました。

結局、体外受精にステップアップするために紹介状を手に、この諏訪マタニティークリニックの吉川先生の元を訪れました。ここを選んだ理由は、何人かの同僚の勧めがあったことと、万が一、ここでチャレンジしてもだめなら諦めがつくだろうと思ったから。体外受精の実績もかなり高いし、体外受精に関する説明会なども行われていて、とてもいい印象を受けました。説明会にも夫婦で参加し、吉川先生の熱意を感じました。そして、それまで体外受精に対して今ひとつ二の足を踏んでいた主人もこの説明会で決心が固まり、「あんなに熱心な先生なら任せてがんばってみよう。」と意見が一致。体外受精1回目は受精卵さえ出来ず、

その頃になると夫婦そろってある程度冷静に治療に向き合っていたので、「受精障害かなあ。それじゃ妊娠しないわけだよなあ。」と苦笑い。2回目からは受精卵は出来ても着床せず。4回目からかすかな陽性反応。間もなく反応が消えてしまいましたが、「おお!!!私も妊娠できるんじゃない!」と残念なはずなのに妙な感動でした。少しずつではあるけれど進歩してきている気がして、この諏訪マタを勧めてくれた同僚にそう話すと、「あ、そう思える?じゃ、妊娠はもうすぐだ。」と言われその同僚の予言通り、その周期で念願の妊娠を果たしました。ここまで結婚してちょうど10年。私が不妊治療について打ち明けた校長に年賀状で「校長先生のあの一言があったからこそ、私はここまでやってこられました。」と報告し喜んで頂くことが出来ました。少しは恩返し(?)が出来たのでしょうか…。

産育休中、世の中では食育が今まで以上に注目され始め、学校栄養職員から栄養教諭へと、自分がステップアップする必要に迫られました。育休中に資格を取るか、復帰してからか。迷った挙げ句、「復帰してから仕事と育児と勉強と家事の4つをこなすのはしんどい。今なら少なくとも仕事はない!」と、放送大学や県の講習会に出席して単位を取りいよいよこの4月から職場復帰しました。昔は贅沢な望みだと思っていたのですが、現在2人目妊娠に向けて吉川先生はじめ、諏訪マタの皆さんのお力を借りて再度、体外受精に挑戦中です。

私の経験から言えることは、治療に没頭しすぎないこと、肩の力を抜くことが大切ってことでしょうか。不妊治療を始めた頃は結果に一喜一憂し、思い詰めていました。でも職場でカミングアウトして開き直ったところで肩の荷が下りたのかもしれない。ただでさえストレスの多い不妊治療。周りに気を使ったり隠し通したりということでも更にストレスを感じるのはとても辛い。確かに、環境の違いでカミングアウトすることさえ出来ない方もいるとは思いますが、でも、私は最初に覚悟して打ち明けたおかげで道が開かれました。「子供がほしい。」その勇気や熱意を分かってくれる人はきっと身近にいます。

それから、私は治療のために仕事や仲間とのお付き合いを制限しませんでした。仕事を辞めてしまえば確かに職場や同僚への後ろめたさなどは感じずにすむし、治療にかけられる時間も余裕が出ますが、収入はなくなるから体外受精の費用は捻出しにくくなります。さらに、「万が一妊娠できなかつたらその後には何が残っているんだろう。治療していくことに後悔はないけれど、仕事を辞めてしまったら後悔するんじゃないだろうか。」と思いました。欲張りかもしれませんが、どうせ1回の人生なら欲張ってもいいんじゃないでしょうか。最初から、仕事に専念、とか治療に専念、とか選んでしまう必要はないと思ったのです。欲張ったおかげで私が得たものは数知れません。何事もがんばりすぎない程度に欲張って、それでいいと思います。